

元白文學集團の小説創作

——「鶯鶯傳」を中心にして——

白居易や元稹を中心とする、中唐時期の文學者たちの交遊グループ（以下、元白文學集團と呼ぶ）が、一つの理念をもって諷諭詩の制作を行なったことは、周知のところであり、その理論と實際について、これまでにいくつもの研究が積み重ねられて来た。一方でまた、この集團の内部、あるいは近邊に位置した文人たちには、小説の創作に關わった者が少なくない。たとえば、元稹には「鶯鶯傳」の作があり、白居易の弟の白行簡も「李娃傳」を著わしているほか、「霍小玉傳」を著した蔣防は、李紳を介して白居易とつながりがあり、「南柯太守傳」や「謝少娥傳」の筆者である李公佐もまた、白行簡に「李娃傳」の執筆を慫慂した人物としてその名が擧げられているように、元白文學集團の小説創作に直接に關わりを持つ人物であった。白居易自身は小説的な作品を遺さなかったとはいえ、「長恨歌」と密接な關係を持ちつつ陳鴻の「長恨歌傳」が作られているように、かれもまた小説創作とまったく無縁ではなかったのである。

新樂府を含む諷諭詩の製作については、白居易と元稹との往復書簡や應酬詩など、元白文學集團に屬する人々自身による、その理念についての言及がいくつも遺っており、かれらが主觀的に意圖していたところを、ほぼ明らかにすることができる。しかし、同じ文學集團の近

小南一郎

邊で行なわれた小説創作については、そうした正面からの言及がほとんどなく、かれらにとつて、小説の創作がいかなる意味を持ったのかについては、まだ十分に解明されていないように見える。しかし、唐代傳奇と呼ばれている小説作品群の中から、もし元白文學集團の周邊で制作された作品を除き去るならば、傳奇小説の精華をなしている、男女の戀愛を主題とした作品の内、特にめづらしいものはほとんど遺らなくなってしまう。そうした點から言っても、この文學集團における小説創作の實態とその背後にあつた理念や意識（無意識の領域に屬するものをも含めていう）を解明することが、かれらの詩や文の創作についての探究に劣らず、重要であることが知られるのである。

元白文學集團の成員たちが、互いに無關係に小説創作を行なったのではなく、かれらの間には、小説創作について、共通の認識が存在したと考えられる。そのことは、すでに指摘されているように、このグループの近邊での小説創作が、少なからざる數で、歌行體の物語り歌謡と對になって行なわれているという、顯著な特徴を持っていることから確かめよう。断片しか遺らず、なお検討の餘地のある作品もあるが、「傳」と歌行體の詩とが對になったものとして、次のような例を擧げることができるのである。

沈既濟「任氏傳」——白居易「任氏怨歌行」
 陳鴻「長恨歌傳」——白居易「長恨歌」
 白行簡「李娃傳」——元稹「李娃行」
 元稹「鶯鶯傳」——李紳「鶯鶯歌」
 元稹「崔徽傳」——元稹「崔徽歌」

これらの小説作品と、同じ物語りを詠った歌行作品と間の關係については、必ずしも全てが同質のものではなかった。「長恨歌」と「長恨歌傳」とは、両者が一體となつて一つの作品を作り上げていゝとされるのに對して、「鶯鶯傳」と「鶯鶯歌」との間には、それぞれで表現されている物語りの筋書きにも大きな差異があつたであらうとの推定がなされている。たしかに「傳」と「歌行」との間の關係については、それぞれの場合で違いがあつたであらうが、「傳」と「歌行」とが對になつて作られているという、ただその一點から言つても、これら一纏まりの作品群が、小説創作についての共通の了解を基礎にして生み出されたことが確かめられるのである。

これらの作品群は、いずれも男女の愛情を主題としたものである。元白文學集團の間からは、それ以外の主體をあつた小説的作品も生み出されている。たとえば、白行簡の「三夢記」、陳鴻の「東城老父傳」(この作品については、陳鴻祖の作であつて、陳鴻とは關係がないとする説もある)などの作品がそれであるが、これら、男女の愛情を主題としない小説作品には、歌行體の歌が添えられた例が見つかからない。こうしたことから、「傳」と「歌行」とが對になる作品群について、かれらの間に、一つのジャンル意識とでもいふべきものが存在したであらうことが證されるのである。具體的資料による實證は將來に待たれるが、そうした共通の了解は、實は、元白文學集團

の内部で自然發生的に醸成されたものではなく、より民衆的な語りとの間になんらかの回路があつて、そうした語りの形態(説と唱との組合わせ)から影響を受けたものだと考えることも可能であらう。

元白文學集團の成員たちは、特に白居易や元稹たちが若かつた時代、諷諭詩や新樂府をめぐる理念と小説創作への意欲との二つの極の間にあつて、雙方の極からの引力を常に感じつつ、文學活動を行なつていたのである(開通詩を入れると三極構造になるのであるが、小説創作に直接には關係しなかつた第三の極については、ここでは述べない)。結論を先に述べてしまふようなことになるのであるが、諷諭詩や新樂府創作の運動が、基本的には士大夫階層の理念を正面から追求するものであるのに對して、小説創作は、そうした士大夫階層の理念からはこぼれ落ちてしまいがちなものに形を與えようとするものであつた。小説創作を通じて、士大夫階層の價值觀が主導する社會では育たない、新しい人間關係を、具象的に定着するための試みがなされていたと考えられるのである。

このように、諷諭詩と小説との二つの極は、互いに矛盾する方向性を備え、對立する價值觀を懷抱していた。そうした矛盾と對立とを最も鮮明なかたちで表明している作品が、元稹の著した「鶯鶯傳」なのである。「鶯鶯傳」が、一つの完成した作品として渾然一體を成しているというよりも、なお未完成的な作品だとの印象を讀者に與えるのは、簡單には調停のできないそうした矛盾を、生のまま讀者の前に提出していることに、その主要な原因があつたと考えられる。それゆゑ、小説では、この「鶯鶯傳」を中心にすえて、その背景にあつたものに分析を加えつつ、元白文學集團が、小説創作を通じて何を表明しようとしていたのかを、考えてみたいと思ふのである。

一 尤物

「鴛鴦傳」の最後に付けられた、主人公である張生の、鴛鴦との關係を断つたことについての自己辯護的な一文は、宋代以來、現在に至るまで、はなはだ評判が良くない。この物語りの最後の部分には、その張生の言葉を中心にして、次のような一段の文章が置かれているのである。

張生がいった、「天から命を授かつて生まれてきた『尤物』(ひとまず、絶世の美女と譯す)というものは、たとえその身に殃いを招くことにならなかつた場合にも、必ず他人に殃いを及ぼすこととなる。もし崔氏のむすめ(鴛鴦)が、たまたま富貴になるめぐりあわせから、高貴な方の寵愛を受けたならば、たとえ雲ととなり雨となつて「主君の枕席に侍べらなかつた」場合にも、蛟や螭となり「不思議な變化の力を身に着けて」、どのような存在に變化したであろうかについては、わたくしの想像に餘るところだ。むかし、殷の帝辛(紂王)や、周の幽王は、百萬もの人口を持つ國に君臨して、その威勢はまことに大きいものがあつたのであるが、一人の女性がそれをめちやくちやにして、民心はばらばらになり、その身は殺戮にあい、今に至るまで天下の笑いぐさとなっている。わたくしの徳は、こうした殃いのもと「である尤物」に打ち勝てるようなものではない。それゆえ、わたくしは氣持ちを抑さえて「鴛鴦との關係を断つたのだ」と。

この時、その場にあつた者たちは、そらつて張生の言葉を深く贊嘆したのであつた。……當時の人々は、その多くが、張生をよく過ちから立ち直ることができた者だと評價した。わたくし(筆

者)は、友人たちと會合した席で、このできごとの意味について、しばしば話題としたのであるが、それは、こうした道理が分かつている者には女性と關係を持つようなことはせず、すでに關係のある者にも、心まで惑わされることがないようにしてほしいとの氣持ちからであつた。

ここでは、張生が鴛鴦との關係を断つたことを正當化する理由として、『尤物』である女性が、男たちをだめにし、時には、それが原因で亡國といった事態にまでたち至る、それゆえ、男性たちは、女性を安易に近づけてはならないとの議論が展開されている。張生の友人たちも、當時の人々も、そうした張生の議論を贊嘆し、誤つた道から立ち直つた張生を、よくやつたと評價したといふのである。

『尤物』をめぐるこの、これと同質の議論は、實は新樂府などの中にも見られるものであつた。たとえば、白居易の新樂府の「李夫人」と題する作品には、次のようにある。

漢武帝、初喪李夫人

漢の武帝が、李夫人を死なせた時のこと

夫人病時不肯別

夫人は、病が重くなつても、帝に別れを告げようとせず

死後留得生前恩

「その結果」死後までも、生前の恩愛をつなぐことができたのであつた

君恩不盡念未已

主君の恩愛は盡きることなく、思いは已まず

甘泉殿裏令寫眞

甘泉殿には、武帝の命令で李夫人の肖像が描かれた

丹青畫出竟何益

しかし繪の具で描かれた繪姿が、何の

不言不笑愁殺人

役に立たとう
しゃべりもせず、笑いもせず、人の悲しみを増すばかり

又令方士合靈藥

そこで、武帝は、方士に、靈藥を調査するように命じ

玉釜煎鍊金爐焚

方士は、玉の釜で熱して鍊り、金の爐で焼いて「反魂丹を作りあげた」

九華帳深夜悄悄

九華の帳を深々と下ろし、ひっそりした夜中に

反魂香降夫人魂

反魂丹の香氣が李夫人の魂を招き降ろした

夫人之魂在何許

夫人の魂はどこにいるのだろう

香烟引到焚香處

香の烟が、夫人の魂を香爐のところへ導いてきた

既來何苦不須臾

やって来たのに、なぜゆっくりとしてゆかぬのか

縹緲悠揚還滅去

はるばると遠く、夫人の魂は歸っていつてしまった

傷心不獨漢武帝

女性の死に心を痛ましめたのは、漢の武帝だけではない。

自古及今皆若斯

いにしえから現在まで、いつの時代も同様なのである

君不見、穆王三日哭

知っているだろう、穆王は三日つづけて哭をなし

重壁臺前傷盛姬

重壁臺のもとで盛姫の死を痛んだのだ
これも知っているだろう、玄宗は一掬の涙を注ぎ

又不見、泰陵一掬淚

馬嵬坡下念楊妃

馬嵬坡のもとで楊貴妃をしのんだのであった

縱令妍姿艷質化爲土

たとえ艶やかな容姿と肉體とが土になつてしまつても

此恨長在無銷期

こうした心残りには、いつまでも消滅する時がない

生亦惑、死亦惑

生きてゐる時にも惑わされ、死んでも惑わされて

尤物惑人忘不得

「尤物」は人の心を惑わせ、忘れることができないくしてしまふ。

人非木石皆有情

人たるもの、木石ではなく、すべて情を備えている以上

不如不遇傾城色

傾城といつた美女とはめぐり會わぬのがよいのだ

この樂府の中でも、「尤物」の危険性が強調されて、人(男性)が情を備える存在である以上、「尤物」に會えば必ず惑わされる。それゆえ「尤物」とは會わぬのが望ましいという。こうした内容と、ひとたびは「尤物」に惑わされた張生が、情を忍んで「尤物」との關係を斷つたことが人々の稱賛を得たとする「鶯鶯傳」の結末の記述とが、同じ論理を基礎にしたものであることは、見やすいところであらう。

尤物という語は、「春秋左氏傳」昭公三十八年の、羊舌氏の滅亡に關わる物語りの中に出てくる言葉である。晋の羊舌叔向が、申公巫臣

(子靈)の娘を妻に迎えようとした時、母親が、次のように言つて反對をした。

子靈の妻(すなわち、妻に迎えようとしている娘の母親)は、三人の夫と一人の主君と一人の息子を死なせ、一つの國を滅ぼし、二人の卿を逃亡させました。そのことをよく考えねばなりません。はなはだ美なるものには、はなはだ悪なるものが伴うと聞いております。あの女は、鄭の穆公の少妃であつた姚子の娘で、子貉の妹でありました。子貉が若くして死んで、後継ぎもなかつたことから、天は、彼女に美を注ぎ込み、彼女を通じて、必ずや大きな災難を引き起こしてやろうと企てられたのであります。

むかし、有仍氏に生まれた娘は、漆黒で美しい髪を持ち、その髪がキラキラと輝いたので、玄妻と名付けられました。樂正の後襲が彼女を娶り、伯封が生まれました。この伯封は、豕のごとく貪欲で、飽きることなく悪事を續けるので、人々はかれを封豕と呼んだのでした。有窮の國王の羿がこれを滅ぼしたため、襲は祭祀を享けることがなくなつたのです。夏殷周の三つの王朝が滅びたのも、太子の申生が廢されて「晋の國に混亂が起こつた」のも、すべて美女が原因です。おまえは、なぜ、そうした美女を娶ろうとするのですか。そもそも、「尤をそなえた物」(とびつきりの上等なもの)は、人の心を奪ひとつて行きます。徳と義とを備えておらぬかぎり、殃いはまぬがれがたいのです。

こうした母親の忠告があつたにもかかわらず、結局、羊舌叔向は子靈の娘を娶つた。その結果、羊舌の家は、その息子の代で滅びたのであつた。

このような、美人亡國史観は、中國の通俗的な歴史観として、古く

より見られるものであり、女性が政治を亂した事件は、特に「春秋左氏傳」が好んで語るところである。

白居易や元稹らがまだ若かつた時期、かれらを中心とする若者グループの中において、女性について「雨夜の品定め」が盛んに行なわれたに違いない。たとえは、「李娃傳」の最後に付けられた、次のようなコメントも、そうした場の雰囲気も傳えるものである。

貞元年間のこと、わたくしは、隴西の李公佐との話しの中で、女性たちの身の處し方の品格づけについて話題になつたことがきっかけで、汧國夫人(李娃)をめぐる出來事について詳しく語つた。李公佐は、手を打ちながら耳を傾けて聞き、わたくしにこれを「傳」にするようにと命じられた。

原文に「婦人操烈の品格を話した」とある「話」は、いとまの時間(特に夜など)に、氣の置けない者どうしが、時間をかけてする物語りを指しているもので、このコメントは、そうした場が傳奇小説を生み出す基盤となつていたことを如實に示している。

そうした若者たちの「話」の場において、主要な話題となつたに違いない女性評論の中で、「尤物」の害といつたこともしばしば語られたであろう。「尤物」に惑わされて國を危うくした例として、近い時代に、玄宗と楊貴妃との實例があつたことから、特に興味を驅りたてられる話題であつたに違いないのである。

「長恨歌」と「長恨歌傳」との、ひと纏まりの作品もまた、こうした場から生み出されたのであつた。そのことは、「長恨歌傳」の最後の部分に付けられた、次のようなコメントからも窺われる。

元和元年の冬十二月、太原の白樂天は、校書郎の職から盤屋縣の尉へと移つた。陳鴻(「長恨歌傳」の筆者)と琅琊の王質夫と

は、この整屋に住まいしていた。ある餘暇いとまの日に、みんなで仙遊寺に遊び、そこで語りあった話しの中で、このこと（玄宗と楊貴妃の物語り）に話題が及ぶと、そろって深く心を動かされたのであった。王質夫は、杯を捧げて白樂天の前に出ると、言った、

「世に珍しい事件は、一世に拔き出した才能を持つ者が、それを作品に仕上げるのでなければ、時の経過とともに消去してしまひ、世に傳わらなくなる。白樂天よ、あなたは、詩に精通し、情に豊かな人だ。この物語りを歌にしたいと思ふが、どうだろう」。白樂天は、そうした要請を受けて「長恨歌」を作つた。思うに、單にその事件に心を動かされたのみならず、同時にまた、「尤物」を教訓とし、亂への道を斷つて、後世の人々にまで、そうした教えを傳へようとしたものであらう。「長恨歌」ができあがると、陳鴻に「傳」を作れとの指圖があつた。

ここに記されている、「長恨歌」の創作をめぐる事情が、全て事實であつたかどうかは確かめられない。ただ、白居易、王質夫、陳鴻といつた元白文學集團に屬する人々の、いとまの日の「話」の場において、玄宗と楊貴妃との物語りが話題になり、そうした中から「長恨歌」と「長恨歌傳」とが生み出されたことは確かであらう。こうした作品の創作意圖は、かれらの主觀的な考えからすれば、單に戀愛物語りを文學化しただけでなく、「尤物」を懲らし、亂への階梯を斷ち切ることにあつた。すなわち、「長恨歌」創作の表面的な目的は、新樂府「李夫人」篇のそれと、同一のものであつたのである。

「長恨歌」が、漢の武帝の寵姫であつた李夫人の物語りを下敷きにして構成されていることについては、すでに多くの人々の指摘がある。「長恨歌」の冒頭の「漢皇は色を重んじて傾國を思ふ」とある一句が

すでに、その中に、李延年が妹の李夫人を武帝に薦めた際の歌の言葉である「傾國」の語を用いて、この作品が李夫人の物語りを、言わば「本歌」としていることをはっきり表明する。この作品の後半部分では、臨邛（四川）出身で、鴻都の客となつた（宮中に召されている）道士が、楊貴妃の魂を求めて東海の仙山を訪れることが述べられるのであるが、その部分の始めに、「長恨歌傳」は、次のようにいふ。

たまたま蜀からやつて來た道士があつて、上皇（玄宗）がこんなにも深く楊貴妃のことを思っていることを知つた。みずから申し出て、自分は李少君の術を備えておりますと言上した。玄宗は、大いに喜び、楊貴妃の魂を招き寄せるようにと命じた。その方士は、術の限りを盡くして探し求めたが、楊貴妃の魂はやつて來なかつた。

そこで、道士は方法を變え、みずからの魂を飛ばせて、東の大海のはてまで尋ねて行くことにするのである。すなわち、この道士は、最初に李少君が李夫人の魂を招いたと同じ方法（憑依の技法）を試したが、魂を招き寄せるという方法が有効でないと分かつたあと、シャマニズムのもう一つの方法である、シャマンの方が魂を異界に飛ばせるという方法（脱魂の技法）を試したのであつた。

こうした筋書きの展開からも知られるように、「長恨歌」の物語りは、單に李夫人の物語りを下敷きにしていただけに止まらず、むしろ李夫人の物語りを發展させた、その唐代的なバリエイションともいふべき性格を備えていた。また新樂府「李夫人」の中でも、漢の武帝の李夫人への思いが「恨長」と表現されていた。「李夫人」と「長恨歌」とでは、主君の「長恨」について、一方はそれを批判し、一方はそれに同情的だといふ點で、一見したところ、反對方向を向いた主

張を持つ二つの作品のように見える。しかし、そうした表面的な差異は、實は同じ基盤の上に出現したものであった。花の色は異なるように見えても、同じ根から成長したものだだったのである。

二 夢遊春

「鶯鶯傳」に語られる物語りが、筆者である元稹自身の戀愛體驗を基礎にしたものであるとの推測は、すでに宋代の隨筆類に見えており、陳寅恪「讀鶯鶯傳」の論文は、元稹の「夢遊春」と、それに唱和した白居易の「和夢遊春」との二つの詩の分析を通じて、そうした古くからの説に訂正を加えつつも、そのことを再確認している。元稹「夢遊春七十韻」の詩は、次のような句から始まっている。

昔歲夢遊春　むかし、夢の中で、春の世界へ遊んだことがある。

夢遊何所遇　夢に遊んだ世界で、めぐり會ったのはどんなことと？

夢入深洞中　夢で深い洞天の中に入り
果遂平生趣　かねての願いを果たしたのであった

以下に、その洞天の世界の描寫がなされ、そこで會った、紅い牡丹に比べられる女性との交渉が、専ら宮體詩風の美句を連ねて述べられている。しかし、そうした夢は破れる。

夢魂良易驚　夢みる魂は、まことに覺めやすく
靈境難久寓　靈なる世界に、長くは留まれない
夜夜望天河　夜ごとに、はるかかなたの川を望みやるが
無由重沿沂　再びそこを訪れる手だては断たれてしまった
……

元白文學集團の小説創作

浮世轉經歷

人の世のさまざまな場面を経歷してきて

道性尤堅固

わたくしの心は何ものにも亂されることがなくな

なった

近作夢仙詩

「しかし」さきごろ夢仙の詩を作ったとき

亦知勞肺腑

なお、心に痛みが残っていることを知ったので

ある

そうした未練を振り切って、「一夢 何ぞいうに足らん、良時に婚娶を事とすべし」という二句を轉折點として、この詩の後半には、京兆の名門である韋氏のむすめを娶ったことと、それ以後の官僚としての經歷とが述べられている。

この詩は、元稹自身はみずから編んだ文集に入れなかったものである。恐らく、こうした若い時代の心の揺れの告白は、特に後半生にあつては、廣く人々に知られることを望まぬものであつたのだろう。この詩が作られた背景について、詳しいことは知られない。ただ、後半部分に述べられていることから推測すれば、朝廷において、みずからが正しいと思ふところをまっすぐに主張したのであるが、結局は、そうした行動が憎まれて、江陵の地方官に追い出されることになつてしまった。そうした政治的な挫折を経験した心の弱りの中での、自分が選擇したとは別の生き方もあつたのではないかという迷いが、一度は訪れたことのある「春」の世界への懐かしさを述べた、この作品の背後にあつたものと推定されるのである。

白居易は、この元稹の作品に唱和して「和夢遊春詩一百韻」を作り、元稹の原詩をなぞりつつ、二百句の作品に作り變えている。その序の中で、白居易は次のように言う。

元稹は、江陵に到着すると、別に「夢遊春詩」七十韻をわたし

に送ってくれた上に、その序には、「この作品に言うところは、わたしを知らぬ者には知らせてはならず、逆に、わたしを知ってくれる者には、必ず知っておいてもらわねばならぬものだ。樂天はわたしを知ってくれている者だから、どうしてもあなたに知っておいてもらわねばならない」と記されていた。わたしは、この言葉をありがたく頂戴し、この詩の意味を幾度も含味したが、過去の行ないを悔いて、將來はその迷いを断ち切るとうという、おおよその主旨であると理解した。ただ、わたしが思うに、過去を悔いず、迷いも断ち切らぬというのであれば論外であるが、もしこれまでを後悔するのであれば、迷いから覺めて別の道を求めるべきであり、その別の道に戻っても、それが虚妄なものだと理解されるときには、眞なるものに歸依すべきなのである。ましてや、あなたは、表面的には儒者の様子をしていますが、内面的には、久しく佛教を尊んできたのである。今よりのち、悟りの道に戻り、空門に歸依する以外に、どこへ戻り、どこに身を落ち着けようというのか。

元稹の「夢遊春」の詩が、夢に遊ぶ春の世界（女性との戀愛の世界）と現實の官僚としての仕官の世界との二極の間で揺れ動く心情を反映したものであるのに對して、白居易の和詩は、多分に觀念的に、もう一つ、佛教的な悟りの世界の存在を指摘して、そこで迷いに決着をつけるべきだと言う。「春」の世界に遊んだことを後悔し、仕官の世界も虚妄だと悟ったならば、「眞」の世界に歸依するべきだと勧めるのである。ちなみに言えば、白居易は、元稹を心の搖れに鋭く反應はせず、みずから高い立場に置いて教誡を垂れている。こうしたお説教は、白居易の作品の中でしばしば聞かされるものであるが、特に

ここで、元稹の苦惱に十分には共感できない白居易を見ると、かれの文學者としての資質に、いささか缺陷があったのではないかと、う感を禁じ得ない。白居易が、小説という多分に「危険な」ジャンルの創作に手を染めなかったことも、こうしたかれの資質と密接に關わっていたに違いない。

元稹が、「夢遊春詩」の序の中で、「わたしを知っている者には、このことを知っておいてもらわねばならない」と言っている、その「わたしを知っている者」とは、前に述べた、一緒に人生や文學を語り、また「兩夜の品定め」をもした、若い官僚／文學者グループの参加者たち（元白文學集團の中核部分）を、主として指しているであろう。「鶯鶯傳」の冒頭の部分も、そうした若者グループ内での交流の雰圍氣を傳えたものである。

貞元年間のこと、張生という人物がいて、温厚で篤實な性格と、端麗な風貌とを備えていた。かれは、内に孤高を持して、禮の掙に背くようなものと交渉を持つことがなかった。時に、友人たちが物見遊山に出かけ、宴席を張ったりすることがあると、それに加わりもしたが、他の者たちがみな、わいわいと騒ぎ立て、楽しまなければ損だという風になっているのに對して、張生は、それに強いて逆らわぬようにするだけで、かれを亂れさせることはできなかった。こうしたことから、年が二十三になっても、女色を近づけたりしたことがなかった。知人がそのことでかれを詰問すると、張生は謝していった、「好色の賦で知られる」登徒子は、本當の意味での色を好む者ではなかった。だからあのよう醜い行動に及んだのだ。それに對し、わたしこそが眞に色を好む者なのであって、ただ相應しい相手に出會っておらぬだけのこと

なのだ。なぜそのように言えるかといえ、おおよそ、尤なる（とびつきり優れた）ものに對しては、常々、深く心を引かれていたのであって、それゆえ、わたしが情を忘れてしまったような存在ではないことが知られるのだ」と。詰問した者も、納得したのであった。

ここでも、女性たちとの關係が話題の中心となっており、そうしたことを語る時、單にみずからの經驗を述べるだけでなく、尤物と情といった主題を通じて、一種の理論化が行なわれていたことが知られるのである。

「鶯鶯傳」の物語りが形成された基盤として、新官僚、あるいは官僚の豫備軍である若者たちの交遊關係の中での語りの場（前述の「話」の場）があった。より廣く言えば、唐代傳奇作品を生み育てたのも、そうした官僚たちの語りの場であった。中唐時期に、男女の戀愛を主題とする傳奇作品が集中して生み出されたのは、若い官僚たちの語りの場が、この時期に特に活氣を備えていたことの直接の反映であったと考えられよう。しかし、そうした活氣も長くは續かなかつた。節度使や藩鎮の幕府での人間關係の中に語りの場の中心が移った時、唐代小説はその相貌を大きく變えてゆくのである。

白居易の「和夢遊春詩」の序は、前引の部分に續けて、その後半に、次のようにいう。

そもそも感じる事が深くなければ、その後悔も身に着いたものとはならず、感じる事が突き詰めたものでなければ、悟りも深くはならない。それゆえ、あなたの七十韻の詩を伸ばして一百韻となし、あなたに替わって、『夢遊』の經驗の中で深く感じた

ことの、その原因となったものを述べ、婚姻仕官の際に、突き詰めて感じる事となったことの、その原因となったものを述べ立てた。そうすることによって、その虚妄さを残るくまなく明らかにし、その間違いを廣く知らしめようと、そうしたことを認識したあと、『眞』にもどり、『實』に身を寄せてもらいたいと、考へてのことなのである。

ここで「婚姻仕官の際」と譯した語は、原文には「婚仕之際」とある。若者たちを『夢遊』の世界から現實へと引き戻すのは、『婚仕』に對していかなる態度をとるかが問われる時なのであり、特に『婚』の問題は、『夢遊』の世界への決別を具體的行動で表わすものであった。「鶯鶯傳」の主題もまた、そこにあつたのである。

科擧をめざす若者たちの周邊には、それぞれなじみの女性がいる場合が多かつたであろう。それは、單に遊廓に遊んで浮き名を流すといった若者が多かつたというに止まらず、特に進士科の合格のために、一般に長い期間にわたる受験勉強が必要であつたことからすれば、身邊の世話をする女性がいる例が少なくなかつたに違いない。門閥派の若者に比べて、科擧派の若者に男女關係に亂れが多いとされるのも、しかるべき必然性があつたのである。そうして、もし受験生が科擧に合格しなかつたならば、そうした女性たちが、そのまま妻の座に納まる場合が多かつたに違いない。むしろ受験生が科擧に合格しない場合の方が、彼女たちにとっては幸福であつただろう。

しかし、一旦、科擧に合格すると、若者は、それまでの女性を捨てて、高門の女性を妻にすることになる。たとへば「李娃傳」で、主人公の鄭生を親身に世話して、科擧に合格させた李娃は、鄭生の官職が定まり、任地へ赴くことになったとき、みずから身を引きたいと申し

出て、次のように言っているのである。

あなたは立派な家柄の方と婚姻を結ばれて、祖先のお祀りを奉じてゆかれるべきなのです。卑しいものと結婚されて、みずからを貶められてはなりません。ご自愛に努められますように。わたしは、ここでお別れいたします。

こうした李娃の言葉は、科擧派の官僚たちが自分本位に考える、理想的な女性がいふせりふであつて、現實には、捨てられる女性たちに悲しみと怨みが遣つたに違いない。ただ、これが、當時の政治社會が、仕官する者たちに要求する處世であり、一種の制度とも言うべきものであつた。そのことは、たとえ、科擧合格の後に續く一連の「合格儀禮」の中でも特に華やかな一節である曲江池での宴飲の狀況からも窺われるのである。

すなわち、春の終わりから夏の初めにかけての時期に、新たに合格した進士たちは、集まって曲江池で宴會を開いた。その宴會の當日は、長安の街を擧げての祝祭の日でもあつて、皇帝も、樓上から進士たちの宴の様子を眺めたのであつた。そうした中で、曲江池の周邊に高官たちの美々しい馬車が連なつたのは、新進士たちの中から、めぼしい者を女婿に選ぶためであつたという。曲江池での、新進士たちの宴會が特に盛んになるのは、「鶯鶯傳」が書かれたよりも一時代くだる、玄宗期以後のことだとされる。しかし白居易たちの時代にも、科擧の合格者たちは高門と婚姻關係を結ぶことを通じて政界への足がかりを求め、高官の家の方でも新進士を女婿にすることによって將來への投資をするという、官僚社會の論理を反映した一種の制度が存在していたに違いない。白居易が「和夢遊春詩」の序の中で「婚仕」といふ言葉を用いているのも、當時の觀念において、婚姻と仕官とが不可

分のものであつたことの反映であり、「夢遊春詩」や「鶯鶯傳」が、迷いを断ち切ると言う、その具體的な内容は、それまでなじんだ女性をすっぱりと棄て、この「婚仕」の道に進むことなのである。

元稹は、現實の政治社會の中で挫折を感じたとき、こうした官僚社會の論理に疑問を懐き、「夢遊春」の世界を振り返つたのであつた。それに對して白居易は、官僚社會が虚妄であることは分かつておるのだから、佛法によつて安心を得るべきだと、助言をした。そんなことを言う白居易自身にも、實は湘靈と呼ばれている、若い時代になじんだ女性がいふ、結ばれることのなかつたこの女性に對して、折に觸れて、懐かしさを表明した詩を遺しているのである。

男女の戀愛を主題とした傳奇小説は、いささか圖式的にいえば、成り上がりたといふ奮闘する科擧派の官僚たちの、そうした生き方への悔恨を含んだ、青春の痛みの記録なのであつた。「婚仕」に全てを捧げつつも、そうでない生き方もあつたのではないかと心が迷うとき、「婚仕」以前の女性との心のかよつた交わりが、官僚世界の非人間的な論理と對照になるものとして、心中に浮かび上がってきたのである。

そうした女性との交渉の記録は、まず神仙(女仙)との交渉という形を取つて作品化された。女性たちとの戀愛を語る形式として、すでに「遊仙窟」に代表される先行形態があつたからである。元稹の「夢遊春詩」もまた、そうした形を借りた試みの一つであつた。ただ、女仙との交渉という舊來の形態を借りるとき、内容もまた夢玄的で定形化されたものに留まらざるを得ず、「夢遊春詩」を讀んでも、元稹の個別的な體驗については、ほとんど知ることができない。恐らく元稹

自身も、より具體的な形で、自分の個別的な體驗を語りたいという強い欲求を懷いたのであろう。

そうしたとき、自分自身の戀愛體驗を、より具體的に語るための枠組みとして、『尤物』の論理が持ち出された。諷諭をこめて批判的に語るという枠組みが、客觀的な描寫を可能にしたのである。『鶯鶯傳』は、表面的には「情」を忍び、亂から立ち直った張生の物語りであつて、士大夫階層の「婚仕」の論理から、それが稱賛されている。しかし、それは枠組みに過ぎなかつた。本質は、作中の鶯鶯の手紙に典型的に表明されているように、そうした士大夫階層の非人間的な論理に深い悲しみの目を向けるところにあつたのである。

『鶯鶯傳』の中には、なお仙女との交渉という古い枠組みの残滓が留められている。たとえば作中に收められた「會真詩」がそれであり、また張生と崔鶯鶯という主人公の名前の設定も、「遊仙窟」の張生と崔十娘とを意識したものであろうと陳寅恪氏は指摘している。また、『鶯鶯傳』の最後の部分で、『尤物』の議論が強調されすぎている点については、讀者に違和感を與えたりもする。しかし、なお生硬なところの遺るこの作品が、尤物という議論を借りて、男女の戀愛を描くための常套手段となつていた『遊仙』という古い枠組みに穴をあけたのであり、それが以後の傳奇小説の展開のための突破口となつたことは、疑いのないところである。

注

- (1) 陳寅恪「新樂府」(『元白詩箋證稿』陳寅恪文集之六、上海古籍出版社)。なお、一々は注記しなかつたが、小論を纏めるに當つたて、陳寅恪氏『元白詩箋證稿』の議論から得た啓發は大きい。

元白文學集團の小説創作

- (2) 李宗爲『唐人傳奇』第三章第二節「互相配合創作傳奇與歌行的文人團體」(一九八五年、中華書局)など。なお白居易の「任氏怨歌行」については、嚴紹鏞『日本《千載佳句》白居易詩佚句輯稿』文史三三、一九八四年、を参照。

- (3) 陳寅恪「長恨歌」(『元白詩箋證稿』所收)

- (4) 于德馨「論《鶯鶯歌》對《西廂記》的影響」四川大學學報叢刊二一輯、一九八三年、の論文は、『鶯鶯傳』が二人の別離に終わるのに對して、『鶯鶯歌』は團圓に終わる内容で、のちの『西廂記』と基本的に同じ筋書きであつたろうと推定する。ただ、『董西廂』の引用する『鶯鶯歌』が李紳の元來の作品そのままであつたかどうかについては、なお嚴密に検討する必要があるところであらう。

- (5) 張政烺「一枝花話」中央研究院歷史語言研究所集刊二〇下、一九四九年。また、小南一郎「李娃傳の構造」東方學報(京都)六二、一九九〇年、も参照。

- (6) 引用の原文には「太平廣記」卷四八八のテキストを用い、魯迅『唐宋傳奇集』、徐士年『唐代小說選』(一九八二年、中華書局)などの校訂を参照した。以下の傳奇小説の本文の引用についても同様である。

- (7) 朱金城『白居易集箋校』卷四(一九八八年、中華書局)。以下「白居易集」の引用は、みな朱氏の校訂を参照した。

- (8) 陳寅恪「讀鶯鶯傳」(『元白詩箋證稿』所收)

- (9) 「才調集」卷五。冀勤校點『元稹集』(一九八二年、中華書局)の校訂も参照した。

- (10) 陳寅恪「豔詩及悼亡詩」(『元白詩箋證稿』所收)にいう、唐代の進士科は、浮薄放蕩の連中の集るところで、倡妓文學とは、ことのはか關係が深かつた。…鄭覃や李德裕が、山東士族の、禮法を重視する家風を守ろうとする立場から、進士科を廢し、そうした連中を追い出そうとしたのも、理由があることなのである。

(11) 妹尾達彦「唐代の科擧制度と長安の合格儀禮」(唐代史研究會編『律令制——中國朝鮮の法と國家』一九八六年、汲古書院)。また傅璇琮『唐代科擧與文學』(一九八六年、陝西人民文學出版社)にも曲江池での宴會のことが詳しい。

(12) 白居易と湘靈と呼ばれる女性との關係については、王拾遺『白居易傳』(一九八三年、陝西人民出版社)ほか、最近いくつかの論考がそれに言及している。

(13) 陳寅恪「讀鸞鶯傳」(注8)